

高校生の親子関係と心理・社会的発達の研究

—対処行動の視点から—

田 中 由 香

I. 問題と目的

代表的な青年期の発達課題として「同一性の達成または確立」が挙げられる。同一性の確立は、最近では過程として捉えられ、同一性の探求的性質の方に焦点付けられてきている。Grotevant (1987) が「同一性探求とは、重要な人生選択について決定を下すために、自分自身や周囲の環境についての情報を引き起こすことをめざした、問題解決行動である」と定義したように、同一性を形成するには、内省や観察を繰り返し、情報について自己と関連のあるものかどうか比較し、判断しなければならない。これが探求の過程といえ、この過程には、自分自身や周囲の環境についての情報に開放的で、同時に批判性を持ってみる能力が必要になるとと思われる。

ところで、最近、家族文脈と青年期の重要な発達課題との関連に視点をあてた研究が多くなされている (Cooper & Grotevant, 1987 ; Hauser, Borman, Jacobson, Powers & Noam, 1991 他)。こうした研究の多くは、「家族との結びつきを基盤とする文脈における青年の独自性 (individuality) の奨励は、青年の心理・社会的発達に最適な環境を提供する」という考えに基づいている。この視点に立って同一性の探求能力を考えると、探求能力とは、他者の視点に気付き、自分の視点と他者の視点を区別でき、自分にとってのひとつの視点を獲得することを求めるものであるといえる。家族文脈の中で、不一致の見解を許容し、異なった見解の表出を認めるような相互作用、あるいは、情緒的關係を示しながら、自己と他者の相違を明確にするような相互作用を経験することが、青年のこうした能力に有効に働きかけることは十分に考えられる。

そこで、本研究では、青年の同一性探求を日常的に直面する多様な変化に対処していく過程として捉え、青年の経験する親子の相互作用の質と同一性探求の対処行動との間にどのような関連があるのか、を明らかにすることを目的とする。この目的に則して、以下のように対処行動については3つの指向性 (Berzonsky, 1992) から、また、家族相互作用については個性化 (Grotevant ら) の概念から検討していく。

A. 対処行動…同一性形成における青年の探求スタイルであり、日常的に直面する多様な課題に接近・処理して

いく際に青年が典型的にあるいは好んで使用する行動様式のことである。

情報指向性…自己に関連する情報を積極的に探求、評価する。

規範指向性…内面化された親や重要な他者、準拠集団の基準や期待を拠り所とする。

拡散/逃避指向性…課題に従事することを避け、延期したり遅らせたりする。

B. 家族相互作用における個性化…二者関係において、お互い結びつきを維持しながらも違う価値観を持った個別の存在として認め合うことであり、独自性と結合性に反映される相互作用を生じる。さらに、独自性は自己主張と分離、結合性は浸透性と相互性に反映される。

自己主張…自己の考え・思いをはっきりと他者に伝える。

分離…自己と他者の相違について表明する。

浸透性…他者の考え・思いに開放的で応答的である。

相互性…他者の考え・思いを尊重し、それに感受的である。

II. 方法

被調査者：父 (平均47歳 分布42~55歳)、母 (45, 41~53)、高校生 (17.2, 16~18) の3名から成る22組 (男子青年の家族8, 女子14) の家族。

手続き：1994年7月下旬から9月上旬に実施された。家族は、家族相互作用課題に参加。話し合いの様子はビデオカメラとテープレコーダーに録音された。また、高校生は、日本版 ISI と自由記述から成る同一性探求の様相に関する質問紙に回答した。

尺度：①家族相互作用課題

資金無制限の一週間の家族旅行に出掛けるという想定で、20分間親子3名で話し合っ、一日一日の旅行の計画 (場所と行動予定) を立てるといもの。この課題は、家族成員がそれぞれの思いを表明することと、協力し合って課題を遂行することを引き出すようデザインされている。得られた家族の話し合いの様相をもとに逐語録を作成し、最初の300発話について、個性化の4側面を表すカテゴリーに分類、評定した。10人の評定者間の一致率は、ほぼ70%に達した。評定回数をその側面の得点とし、以下、分析を施した。

②日本版 ISI

Berzonsky (1992) の同一性様式質問紙表 (ISI 尺度) を翻訳したものである。予備調査にて尺度構成を確認し、下位因子として対処行動を表す3つの指向性、すなわち情報指向性、規範指向性、拡散/逃避指向性を得た。

③自由記述による同一性探求の様相に関する質問紙

同一性探求の様相に関して、青年が重要視している領域や、その領域での対処方法について付加的なデータを得るため、実施された。

Ⅲ. 結果と考察

家族相互作用の個性化を表す4側面と3つの指向性において相関関係を検討した。また、自由記述で得た同一性探求の様相と家族相互作用の様相について質的に検討し、以下のような知見を得た。

1. 青年が情報指向性を高く持つことは、青年-父間で分離が表明され、母親の浸透性が低く、父から母への相互性が低いことに関連があった。性別では、男子青年には有意な関係が見出されなかった。女子青年では、情報指向性の高さは、娘から父へ浸透性を表明し、父から娘へは相互性を表明すること、また、父から母への相互性が低く、母の浸透性が低いことに関連していた。質的に検討したところ、情報指向性を高く示す青年の家族では、特に父親が青年に相互作用を奨励し、青年に違った視点からの意見を伝える姿勢を持っていた。また、全体的に家族は、反対意見に対しても関心を示しており、葛藤は起きにくかった。同一性探求については、情報指向性を示す青年は、自分を試したり高めたりできる領域に関心を持っていた。

情報指向性を示す青年の家族では、親が青年の相互作用への参加に関心を払っており、青年と十分に向き合うことのできる姿勢を持っているといえる。そして、葛藤をそれほど起こさずに青年-父がお互い分離を表明し合うことは、お互い違った価値観を持つ一個人として高く機能し合っていると考えることができる。同一性を形成するには、内省を繰り返し、情報について自己と関連の

あるものかどうかを比較し、判断しなければならない。このことを考えると、情報指向性は同一性形成を積極的に行なっていく姿勢を表した探求スタイルといえる。父親との間で情緒的な支えを経験すること (特に女子青年)、あるいは一個として高く機能し合えること (特に男子青年) が、同一性探求の積極性に重要な役割を果たしているのかもしれない。

2. 規範指向性を高く持つ女子青年では、父は分離を表明するが自己主張と相互性の表明が低く、娘が自己主張と分離を表明することに関連が見出された。また、母親から娘へ浸透性が表明されることに関連があった。質的には、規範指向性を示す青年の家族では、母-娘は似た意見を表明し、つながりが強く、どちらかといえば父親は排除されていた。また、規範指向性を示す青年は、対人関係に関連する領域を重視していた。

規範指向性を示す青年は、父親の異なった視点からの情報には関心を示す機会が得にくく、母親という限られた範囲内から支持を受け、独自性を高めていくような相互作用を経験している。

3. 拡散/逃避指向性を高く持つ男子青年では、母の自己主張が低く、息子から父への分離の表明と関連があった。一方、女子青年では、父から母への分離の表明に関連が見出された。質的には、拡散/逃避指向性を示す青年の家族では、決定にまとまりがなく、また、反対意見を述べると家族に葛藤状況が起こりやすく、相互作用が中断される傾向にあった。同一性探求については、拡散/逃避指向性を示す青年は、探求領域を明確化せず、ありたくない姿に関心を払っていた。

拡散/逃避指向性を高く示す青年の家族では、相手の意見に批判的で、話し合いの中で葛藤が起こりやすく、相互作用が中断されやすいといえる。こうした関係では、家族成員は自己の見解を述べにくく、旅行計画という課題を解決していくことは困難である。これは個性化を経験しにくい関係といえよう。